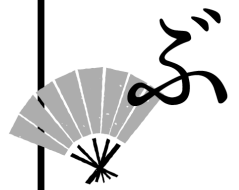


古典落語



学



落語家

立川談四楼

第十七回 猫の皿

地方

へと仕入れに出かけた道具屋さん。だまされかけたりして散々な目に。「悪い後はいいと

言う。次の旅に期待しよう」と通りかかった茶店。

「爺さん、いい景色だね」

「はい、景色だけが自慢で」

「麦湯をもらおうか」

「へい、少々お待ちを」

ふと見ると、店先で猫が餌を食っている。

「しようがねえな、食い物商売の店が。オレは猫が大嫌いなんだ」

いまいまして猫を見ていると、自然に餌の皿が目に入る。

「まさか。そんなわけねえよな。うん、待てよ。やっぱり本物だ。驚いた。物を知らないってのは恐ろしいな。こりゃ絵高麗の梅鉢だ、間違いねえ。一枚でも二百両、五枚揃えば千五百両は下らねえって代物だ。何とか手に入れてえがどうしよう。そ

うだ」

「はい、お待ちどお様」

「爺さん、あの猫を譲ってくれねえかな」

「あんな汚ない猫をまたどうして」

「オレは旅の多い仕事で、年に半年は江戸を留守にするんだ。カミさんが留守を守ってくれるわけだけど、猫を飼いたかったんだ。オレが猫嫌いなものを知ってるから、今まで我慢をしてた

んだな。そこで、カミさん孝行したいと思ってね。明日、江戸に着いて、この猫を見せると喜ぶと思うんだ」

「ああ、そういうことで。猫は婆さんが飼ってましてな。十匹以上もおりますんで、大丈夫でしょう。奥にいますから聞いてきます」

「あ、爺さん。これで婆さんに頼んでくれ」

「さ、さ、三両。こんな大金」

「いいってことよ。今回の旅は儲かったしね。これでカミさんが喜ぶと思うと安いもんだ」

「では少々お待ちを」

道具屋

はニンマリ。何しろ二百両の皿です。三両出しても儲けは百九十七両なのです。

「どうだった。譲ってくれるかい」

「現金なものとは、このことでしょう。喜んでお譲りすると」

「そうかい。かと言って懐へ入れて運ぶってわけにもいかねえや。籠かなんかに入れてくれ。息ができるように。宿で餌を食わせなきゃいけねえ。馴染んでるものがいいたろう。その汚ねえ皿を紙かなんかに包んで一緒に入れてくれ」

「でしたらお椀を」

「いや、その皿でいいんだ。馴染んでるし」

「そうですか。でもその皿は譲れないんです」

「へえ、どうして？」

「お客様がご存知かどうか分かりませんが、その皿は絵高麗の梅鉢と申しまして、それは高価なものなんです」

「この汚ない皿が？」

「はい、一枚で二百両、五枚揃えば千五百両という代物です」

「この汚ねえ皿が？」

「はい、目利きの方、鑑定人にも見てもらいましたが、真正銘の本物でございます」

「へえ、驚いた。この汚ない皿がねえ」

「ですから、猫はともかく皿は譲れないのでございます」

「じゃあ聞くけどよ爺さん。何だかってこういう皿で猫に餌を食わせてるんだよ」

「はい。この皿で猫に餌を食わせますとな」

「うん」

「ときどき猫が三両で売れるんです」

やられて

しまいましたね道具屋さん。なまじ欲を出したために、そこを利用

されたわけです。騙すつもりが騙されたという世間によくあるパターンで、落語はそういう現象も巧みに取り込んでいるのです。

ついてない時は大人しくしているのが一番ですね。で、気力体力が充実した時に勝負をかければいいんです。